大学生における集団内の人間関係とストレスについて

0807066
植田　晃壮

【目的】

人間関係が発生する中で上下関係はその関係間にほぼ存在していると言える。労働の立場では上司と部下，学生の立場では教授と学生の関係などが挙げられる。そして、その集団は，学生で構成しているサークルや部活動，アルバイトなどの集団にも存在しているはずである。そして，学生のストレスや集団内での行動に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

本研究では、新井(2004)の対先輩行動尺度，上野(2000)の上下関係重視尺度，矢冨ら(1995)が分析したPSRSを使用し，集団に所属している大学生の先輩に対する意識や行動に違いがストレスにどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。仮説として，集団に所属さえしていれば所属集団に関係なくストレス得点が高くなるという仮説と先輩に好意的な態度（親交・参照）が高いとストレスをあまり受けないという仮説を立てた。

【方法】

北星学園大学の学生176名（男性77名，女性99名）に質問紙調査を行った。学年別の内訳では，一年生が48名，二年生が87名，三年生が13名，四年生が28名であった。調査は11月中旬～11月下旬に行った。

質問紙は

・フェイスシート：記入日，学科，学年，性別

・集団参加経験：上下関係のある集団へ所属しているかどうかと所属したことがある集団の構成員の傾向

・上下関係意識・行動尺度：新井（2004）で用いられた集団フォーマル性尺度と対先輩行動の質問項目と上野（2000）で用いられた上下関係重視尺度

・PSRS　　の項目で構成した。

【結果と考察】

まず、各質問項目と質問項目を得点化した各項目の平均点と信頼性をj¥確認したところ、上下関係意識・行動項目の5項目において天井効果がみられた。信頼性は上下関係意識・行動項目において$\alpha=.86$，PSRSの項目が$\alpha=.95$であった。

仮説1を検討するために各得点を従属変数とした分散分析を行った。その結果、服従得点のみ0.1%水準で有意差が確認された。多重比較では文化系集団のみ有意に得点が低かった。そのため、仮説1は採用された。

また、どの行動がストレス反応につながっているのかを調べるために各得点間の相関分析と重回帰分析を行い、結果として寄与率が低かったが、パス図を作成した。その結果、全体のデータにパス図では攻撃得点と衝突回避得点で正のパス、親交得点から負のパスが作成された。集団別では、体育会系集団では、服従得点、参照得点、攻撃得点から衝突回避得点、集団フォーマル得点につながるパスが作成された。文化系集団では上下関係集団得点と親交得点からパスが作成された。どちらでもない集団ではモデル全体に有意差がなかった。この結果から、仮説2は一部採用された。

大学生の集団内の人間関係は、学生が集団に所属さえしていればストレスを感じるがそのストレスの生起の傾向が異なると推測された。全体的なストレス生起の流れとしては先輩に対する礼儀を意識することによって衝突を回避しようとするため、ストレスを感じやすいのだと考えられる。そして、集団の特徴としては体育会系の集団では集団のあり方にストレスを感じやすく、文化系では集団の構成員同士のあり方によってストレスが生起する傾向が示唆された。

本研究では、一部分ではあるが、集団内での上下関係に関連するストレス発生の蛍光を明らかにできたといえる。しかし，本研究では被験者の少なさや質問紙作成方法の杜撰さが課題として挙げられる。そのため，次回以降の研究では，被験者を更に増やすことや使用する上下関係関連項目の使用、そして、より正確にストレスを測定できる尺度を使用することでより詳細な分析や異なる結果につながると考えられる。

（指導教員　豊村　和真　教授）